

がん・心臓病・脳卒中

アテローム血栓性脳梗塞

脳卒中



脳卒中センター
医師
山岡 由美子

アテローム血栓性脳梗塞とは・・・

食生活の欧米化や運動不足に伴って最近増加しているのが、動脈硬化を基盤として起こるアテローム血栓性脳梗塞で、脳梗塞全体の約 25%を占めます。

高血圧・糖尿病・高脂血症（特に悪玉コレステロールと呼ばれている LDL コレステロールが高い状態）や喫煙の環境に長年さらされていると、動脈の壁の内側にタイルを敷き詰めたとように並んでいる血管内皮細胞が傷み、細胞の隙間から、悪玉コレステロールが血管壁に侵入してたまります。これを引き金として、血管壁で炎症や細胞の増殖など、一連の好ましくない変化が起き、最終的に血管壁が厚く硬くなった状態を、動脈硬化（アテローム硬化）（図 1）といいます。排水管が古くなると、管の内側に油汚れやさびがついて、内側がごつごつしてくるのに少し似ています。

アテローム硬化が進むと・・・

動脈硬化で厚くなった血管の壁は、血管の内側に張り出し、血液が流れる部分（血管内腔）を狭くします。内腔が狭くなったところでは、庭の水まきの時にホースの口をつぶして水を飛ばしているような状態になっていて、血液がびゅーびゅーと噴き出していますので、血の塊ができやすく、厚くなった血管の壁も壊れやすくなります。この壁が壊れてしまうと、壊れた部分に血の塊（血栓）が付いて、ど

んどん大きくなって血管をふさいだり（図 2）、壊れた壁や血栓の一部が流れていって、その血管の下流で詰まってしまう（図 3）ことがあります。また、血管内腔が非常に狭く詰まりかかっているときは、脱水や血圧の低下が起きると、そこから下流の血液の流れが極端に悪くなります（図 4）。このようなメカニズムで、血の流れが途絶えたり、ほとんど流れていない状態になると、その血管が栄養や酸素を運んでいる範囲の脳の組織が死滅し、脳梗塞となります。これらを総称して、アテローム血栓性脳梗塞といいます。

予後と予防法

アテローム血栓性脳梗塞は、脳の底部を走る動脈や頸動脈などの比較的太い動脈の動脈硬化を基盤として起きますので、脳梗塞の範囲が広く、症状が重篤であることが多いようです。初めは症状が軽くても悪化しやすく、症状が良くなったり悪くなったり変動するという特徴もあります。発症の予防は、動脈硬化を起こさないことに尽きるのですが、若いころから塩分・カロリー控えめの食事と運動を習慣とし、喫煙はやめ、高血圧・糖尿病・高脂血症と診断された場合は、内服薬の力を借りて病気を良い状態に保つように努力することが非常に重要です。最近では、これらの病気を治療しながら血管内皮細胞を守る効果を持つ薬がいくつか使用できますので、主治医にご確認ください。

